

經濟思想の事典

住谷一彦・伊東光晴編



有斐閣選書

現代とは何か。本書はこの問いを考えるために、一八世紀末から今日に至る二百年の世界史を經濟思想を軸に描き出すと共に、その間に築かれた經濟社会の構造、經濟思想を現代的視点から多様な事典項目として設定しました。

經濟思想の事典

住谷一彦・伊東光晴 編



有斐閣
選書

経済思想の事典

〈有斐閣選書〉

昭和50年10月20日 初版第1刷印刷

昭和50年10月30日 初版第1刷発行



編 者

すみ 住い 伊 谷 東 かい 一 光 ひこ 彦 晴

発 行 者

え 江 ぐさ 草 ただ 忠 あつ 允

発 行 所

株式 有 斐 閣
会社

東京都千代田区神田神保町2～17

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 大日本法令印刷・製本 和田製本工業

© 1975, 住谷一彦・伊東光晴. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります

はしがり

▼第二次大戦後の経済学の発展はいちじるしい。アダム・スミス以来の経済学の発展のうち、こと、理論に関するかぎり、そのなかばは、戦後に実現されたともいわれている。しかし、その内実をみると、一九六〇年代までは、既存の理論の延長線上の発展であった。だが、七〇年代に入ると、質的変化も見られだしている。新古典派総合の動揺のみならず、新リカード派、ラディカル・エコノミックスの登場に加えて、マルクス・リバイバルという声さえある。

▼経済理論に関するかぎり、こうした激しい発展の過程で辞典を編むということは、発展に即応するため、要請されるにもかかわらず、新しい発展に対応できないものを編むということに他ならない。戦後の経済学辞典のほとんどが学問的生命が短かった理由である。

▼だが、経済思想に関するかぎり、われわれは、戦後のその大きなうねり——戦後史に登場した南北問題、社会主義の多様の道・多様の型態、そして体制をみる複眼の目の必要性等々——をとらえ得る時の流れをすでに持ち、この大波を通して、過去の歴史を見なおす余裕を持ちえている。

▼と同時に、経済学が分配や福祉など、人間の生きた生活に関係すればするほど、また、経済学を支えている現実の経済社会の変化が大きければ大きいほど、その変化の動向を考

えるために、問題を歴史と思想の深淵の中にとらえなおすことが必要である。なぜならば、経済理論は、複雑な現実から見れば、それを一面で切り捨てたものにほかならず、不確かな知識であるという自戒をつねに持っていなければならないものであり、にもかかわらず、それをもって、人々の切実な問題に答えを用意しなければならないというきびしさを持っている。それゆえに、理論の一面性を、歴史と思想の中で補わなければならないのである。

▼このように、理論の発展は、歴史と思想への回帰を要請するにもかかわらず、経済思想に関するかぎり、道しるべとなるべき辞典(事典)は戦後存在しなかったといつてよい。

▼こうした道しるべの役割をいくぶんでも果たすため、本書は二部構成をとり、第Ⅰ部では、それぞれの時代を鳥瞰し、第Ⅱ部では、事典形式をとり、現代的視点からの編別構成を編むと同時に、各項目の位置づけを考えることができるように、中項目ともいえるべき「グループ見出し」を設定した。読者はこの構成の特殊性のなかに、現代的意味を見出されることと思う。また、付言すれば、本書は、辞(事)典的性格とともに、第一ページ目から順に読み進むことのできる、一貫した体系を持っている。

▼なお、石油ショック以後のコストの上昇のため、もっぱら経済的理由のため、索引を割愛しなければならなかったことを読者にお詫びする次第である。

一九七五年九月

住谷 一彦
伊東 光晴

※ 執筆者紹介

(五十音順)

- 浅野 栄一 (中央大学教授)
荒川 幾男 (東京経済大学教授)
安藤 勝美 (アジア経済研究所)
池田 昭 (和歌山大学教授)
石川 晃弘 (中央大学助教授)
石川 栄吉 (東京都立大学教授)
石坂 昭雄 (北海道大学助教授)
伊東 光晴 (法政大学教授)
稲上 毅 (法政大学講師)
岩田 昌征 (アジア経済研究所)
海原 峻 (評論家)
江口 朴郎 (津田塾大学教授)
大林 信治 (大阪大学助教授)
岡崎 陽一 (厚生省人口問題研究所)
尾上 久雄 (京都大学教授)
加瀬 正一 (関東学院大学教授)
川鍋 正敏 (立教大学教授)
菊地 昌典 (東京大学助教授)
北原 淳 (アジア経済研究所)
木戸 蓼 (神戸大学教授)
木村 英亮 (横浜国立大学助教授)
楠井 敏朗 (横浜国立大学助教授)
久保 まち子 (日本女子大学教授)
倉塚 平 (明治大学教授)
倉松 功 (東北学院大学教授)
古賀 英三郎 (一橋大学教授)
小島 麗逸 (アジア経済研究所)
後藤 政子 (時事通信社)
斉藤 孝 (学習院大学教授)
佐瀬 昌盛 (防衛大学校教授)
佐藤 経明 (横浜市立大学教授)
佐藤 宏 (アジア経済研究所)
佐藤 隆三 (横浜市立大学教授)
島野 卓爾 (学習院大学教授)
下村 由一 (千葉大学助教授)
庄司 興吉 (法政大学助教授)
白西 紳一郎 (現代アジア文庫)
杉原 四郎 (甲南大学教授)
鈴木 幸寿 (東京外国語大学教授)
住谷 一彦 (立教大学教授)
田中 真晴 (甲南大学教授)
谷浦 孝雄 (アジア経済研究所)
田村 信一 (立教大学大学院博士課程)
徳永 恂 (大阪大学教授)
富永 幸生 (青山学院大学助教授)
永井 進 (法政大学助教授)
中内 恒夫 (国際基督教大学教授)
中村 達也 (中央大学助教授)
中村 貞二 (東京経済大学教授)
似田 貝香門 (山梨大学講師)
縫田 清二 (横浜国立大学教授)
野尻 武敏 (神戸大学教授)
野村 良樹 (大阪市立大学助教授)
畑 孝一 (福島大学助教授)

林 晃 史 (アジア経済研究所)
林 武 (アジア経済研究所)
林 直 道 (大阪市立大学教授)
菱 山 泉 (京都大学教授)
肥 前 栄 一 (東京大学助教授)
平 田 喜 彦 (法政大学教授)
福 富 正 実 (阪南大学教授)
保 住 敏 彦 (愛知大学講師)
松 尾 太 郎 (法政大学教授)
松 島 敦 茂 (滋賀大学助教授)
丸 尾 直 美 (中央大学教授)
水 沼 知 一 (東京都立大学教授)
故見田 石 介 (前 日本福祉大学教授)
宮 崎 義 一 (京都大学教授)
宮 鍋 幟 (一橋大学教授)

宮 本 憲 一 (大阪市立大学教授)
村 上 敦 (神戸大学教授)
村 野 勉 (アジア経済研究所)
望 月 清 司 (専修大学教授)
山 内 一 男 (法政大学教授)
山 口 定 (大阪市立大学教授)
山 崎 怜 (香川大学教授)
山 下 幸 夫 (中央大学教授)
山 田 耕之介 (立教大学教授)
山 中 隆 次 (中央大学教授)
唯 是 康 彦 (農業総合研究所)
楊 天 溢 (亜細亜大学教授)
吉 澤 芳 樹 (専修大学教授)
吉 田 静 一 (神奈川大学教授)

目次

第Ⅰ部 経済思想から見た世界史像

1 一八世紀末～一九世紀初頭とは何か

★市民化の分岐と自己否定

山崎 怜 3

■古典音楽の時代と社会史の問題 (3)

■抽象Ⅱ具体的個人の確立 (6)

■古典音楽と古典経済学 (9)

■市民化の分岐 (12)

■市民社会と資本制社会 (15)

■スコットランドと古典経済学 (18)

■市民社会の行方 (22)

2 一八四〇年代とは何か

★社会主義とその諸形態

肥前 栄一 26

■社会改良の模索 (27)

■変革主体としてのプロレタリアート (29)

■ヨーロッパへの絶望 (33)

3

一八七〇年代とは何か

★古典学派的經濟像の崩壊

杉原 四郎

39

■一八七三年恐慌と大不況 (39)

■限界革命 (41)

■マルクス主義の国際的浸透 (45)

■古典学派的經濟像にかわるもの (48)

4

一九世紀末とは何か

★帝国主義と危機の思想

住谷 一彦

51

■危機の時代 (51)

■イギリス——植民地帝国主義 (52)

■ドイツ——似而非ボナパルティスムス (56)

■ロシア——ツァーリズムとヴ・ナロード (61)

■官僚制的合理化と社会主義 (65)

5

一九三〇年代とは何か

★危機の時代

A 大不況と国家独占資本主義

川鍋 正敏

71

■一九二九年大恐慌 (71)

■大不況と国家独占資本主義の定着 (73)

■アメリカ型国家独占資本主義Ⅱニュー・デール (74)

6

戦後とは何か

★シヴィル・ミニマムから市民社会像か

伊 東 光 晴

90

- 第三世界の登場 (90)
- 戦後資本主義 (91)
- 問われる戦後 (93)
- 成長経済学 (94)
- 市場の復活 (96)
- 経済学の第二の危機 (97)
- 生存権思想から生活権思想へ (100)

B

経済学の第一の危機と現代経済学の生誕

伊 東 光 晴

83

- ドイツ型国家独占資本主義Ⅱナチズム (77)
- 人民戦線・スターリン時代 (81)
- 一九三〇年代と現代 (81)
- 経済学の第一の危機と現代経済学の生誕
- 一九三〇年代と一九二〇年代 (83)
- 計量経済学会の創設 (85)
- ケインズ革命 (86)
- 不完全競争論から寡占論への発展 (87)
- 一般均衡論と新古典派経済学の結合 (88)
- 新厚生経済学の登場 (88)

第Ⅱ部 経済思想の事典

1 市民社会における

組織と人間をめぐる問題

105

■西欧市民社会論の形成 (106~115)

資本主義と市民社会

似田貝香門

106

イギリス市民社会論

山崎 怜

108

フランス市民社会論

吉田 静一

110

ドイツ市民社会論

山中隆次

112

アメリカ市民社会論

楠井敏朗

114

■西欧市民社会論の展開 (116~125)

イギリス市民社会論の発展

杉原四郎

116

フランス市民社会論の発展

古賀英三郎
松島敦茂

118

ドイツ市民社会論の発展

大林信治

120

アメリカ市民社会論の発展

稲上 毅

122

日本における市民社会論

杉原四郎

124

■危機とその政策思想 (126~137)

帝国主義論

保住敏彦

126

ファシズム

山口 定

130

ニュー・ディール

平田喜彦

132

人民戦線

斉藤 孝

134

日本ファシズム

荒川幾男

136

■現代の資本主義 (138~157)

経営者革命論

中村達也

138

大衆社会論

鈴木幸寿

140

ケインジアン思想

浅野栄一

142

現代資本主義論

中村達也

144

新産業国家論

中村達也

146

多国籍企業論

宮崎義一

148

新古典派総合

永井 進

150

新自由主義

野尻武敏

154

国家独占資本主義論争

川鍋正敏

156

■管理社会批判 (158 ~ 169)

管理社会論

フランクフルト学派

構造的改革

ニュー・レフト

ラディカル・エコノミックス

プロレタリア文化大革命

■世界経済の政策思想 (170 ~ 177)

経済統合

自由化

管理通貨

国際通貨

☆

2 工業化過程における

先進と後進をめぐる問題

■工業化の理論的系譜 (180 ~ 193)

重商主義の経済思想

古典学派の経済思想

徳永 恂

158

徳永 恂

160

尾上 久雄

162

海原 峻

164

中村 達也

166

小島 麗逸

168

中内 恒夫

170

島野 卓爾

172

加瀬 正一

174

加瀬 正一

176

179

山下 幸夫
吉澤 芳樹180
182歴史学派の経済思想
経済発展論中村 貞二
中村 達也188
192

■工業化の後進型と「国民経済」の形成 (194 ~ 203)

国民経済内部成長型——アメリカ型

石坂 昭雄

194

国民経済跛行型——ロシア型

肥前 栄一

196

国民経済跛行型——日本

水沼 知一

198

国民経済欠如型——オランダ型

石坂 昭雄

200

植民地型——アフリカ型

楊 天溢

202

■環境・資源問題 (204 ~ 215)

公害

永井 進

204

都市問題

宮本 憲一

206

環境権

永井 進

208

エコロジ

永井 進

210

資源問題

伊東 光晴

212

人口問題

岡崎 陽一

214

☆

3 資本主義から社会主義への

移行をめぐる問題

217

■ユーロピア社会主義 (218 ~ 231)

原始共產主義

石川 栄吉

218

プラトンの共產主義

倉 松 功

220

ユダヤ教の共產主義

倉 松 功

221

原始キリスト教の共產主義

倉 松 功

222

中世カトリックの共產主義

倉 松 功

223

古プロテスタンティズムの共產主義

倉 塚 平

224

啓蒙思想の共產主義——空想的社会主义

吉田 静一

226

ロマン主義の共產主義——パリ・コミューン

吉田 静一

228

無政府主義と初期社会主義

畑 孝 一

230

■マルクス主義の形成と展開 (232 ~ 273)

マルクスとエンゲルス

山 中 隆 次

232

修正主義論争

富 永 幸 生

242

オーストロ・マルクス主義

富 永 幸 生

244

レーニンとロシア革命

田 中 真 晴

246

ドイツ革命とレーテ

富 永 幸 生

248

主体的唯物論

德 永 恂

250

フランクフルト学派の形成と展開

荒 川 幾 男

252

ソヴェト・マルクス主義

佐 藤 経 明

256

西欧マルクス主義

海 原 峻

258

東欧マルクス主義

佐 藤 経 明

260

第三世界のマルクス主義——ラテン・アメリカのマルクス主義

後 藤 政 子

262

第三世界のマルクス主義——アジアのマルクス主義

谷 浦 孝 雄

264

第三世界のマルクス主義——北朝鮮マルクス主義

村 野 勉

266

第三世界のマルクス主義——アジアのマルクス主義

楊 天 溢

268

第三世界のマルクス主義——北ヴェトナム・マルクス主義

庄 司 興 吉

270

中国マルクス主義

久 保 ま ち 子

274

日本マルクス主義

丸 尾 直 美

276

イギリス社会民主主義

佐 瀬 昌 盛

278

■社会民主主義 (274 ~ 279)

マルクス主義

望 月 清 司

280

共同体的所有

望 月 清 司

282

市民的所有と資本家的所有

望 月 清 司

284

社会主義的所有

望 月 清 司

286

■マルクス主義の所有論 (280 ~ 286)

社会主義的所有

望 月 清 司

288

共同体的所有

望 月 清 司

290

市民的所有と資本家的所有

望 月 清 司

292

社会主義的所有

望 月 清 司

294

4 社会主義における

☆

計画と自由をめぐる問題

■計画と自由 (288~299)

市民社会と社会主義

スターリン体制

中ソ論争

ユーゴスラヴィア社会主義

チェコスロヴァキア社会主義

ポーランド社会主義

■ソ連型社会主義化の問題 (300~307)

ソ連計画経済の歴史——戦時共産主義とネツプ

社会主義工業化と農業集団化

社会主義企業と利潤導入問題

社会主義国際分業

■計画経済と市場経済 (308~324)

社会化論争

田村信一	308	菊地昌典	288
		菊地昌典	290
		白西紳一郎	292
		岩田昌征	294
		石川晃弘	296
		山田耕之介	298
		野村良樹	300
		野村良樹	302
		宮鍋 幟	304
		宮鍋 幟	306

5 社会主義圏における南北問題

☆

競争的社会主義論
分権制社会主義論

収斂化論

近代化と産業化——後進国発展論争

近代化と産業化——「非資本主義的社会主義への道」論争

主義への道」論争

■東欧における工業化の問題 (326~341)

社会主義における国家と民族

ユーゴスラヴィア社会主義における工業化

ハンガリー社会主義における工業化

チェコスロヴァキア社会主義における工業化

ポーランド社会主義における工業化

東ドイツ社会主義における工業化

ルーマニア社会主義における工業化

■アジアにおける工業化の問題 (342~349)

岩田昌征	310	岩田昌征	314
岩田昌征	318	野尻武敏	320
中内恒夫	322	肥前栄一	325
江口朴郎	326	岩田昌征	328
木村英亮	332	佐藤経明	336
岩田昌征	340	石川晃弘	342
		山田耕之介	344
		下村由一	346
		木戸 蒨	348

中国社会主義における工業化

山内一男

342

北朝鮮社会主義における工業化

谷浦孝雄

344

北ヴェトナム社会主義における工業化

村野勉

346

化

イスラエル社会主義における工業化

縫田清二

348

■アフリカにおける工業化の問題 (350~353)

アラブ社会主義における工業化——エ

林武

350

ジプト

林晃史

352

ブラック・アフリカ社会主義における工業化

林晃史

352

る工業化

■南アメリカにおける工業化の問題 (354~357)

キューバ社会主義における工業化

後藤政子

354

チリ社会主義における工業化

後藤政子

356

☆

6 資本主義圏における南北問題

359

■開発理論の系譜 (360~371)

「国民経済」論の系譜

住谷一彦

360

福祉世界論の系譜

中村達也

364

現代の開発政策

村上敦

366

批判的開発理論の系譜

中村達也

368

緑の革命

唯是康彦

370

■経済と宗教の相関をめぐる問題 (372~379)

イギリスとアイルランド

松尾太郎

372

アラブとイスラエル——パレスチナ問

林武

376

題

インドとパキスタン

佐藤宏

378

■新植民地主義 (380~385)

ECとアフリカ

安藤勝美

380

アメリカとラテン・アメリカ

後藤政子

382

日本と東南アジア

北原淳

384

■伝統的社会構造を揚棄する問題 (386~389)

アジア的生産様式論争とヴァルガの

福富正実

386

呼びかけ

福富正実

386

フランスにおけるアジア的生産様式

福富正実

387

論の展開

福富正実

387

ハンガリーのテーケイのアジア的生

福富正実

388

産様式論

福富正実

388

日本におけるアジア的生産様式論争

福富正実

389

7 経済学方法論

391

■批判的合理主義の諸潮流 (392 ~ 403)

帰納法・演繹法

杉原四郎

392

論理実証主義と経済学

佐藤隆三

394

理解の方法

池田 昭

400

機能主義

稲上 毅

402

■弁証法 (404 ~ 412)

弁証法的方法

見田石介

404

唯物史観と経済学

林 直道

408

■価値判断と方法論争 (414 ~ 425)

価値判断論争

大林信治

414

方法論争

大林信治

418

新古典派体系の成立条件

菱山 泉

422

■経済学と人間の問題 (426 ~ 435)

ホモ・エコノミクス

中村達也

426

日本の経済哲学

住谷一彦

430

第Ⅰ部 経済思想から見た 世界史像

- 1 18世紀末～19世紀初頭とは何か ★市民化の分岐と自己否定
 - 2 1840年代とは何か ★社会主義とその諸形態
 - 3 1870年代とは何か ★古典学派的経済像の崩壊
 - 4 19世紀末とは何か ★帝国主義と危機の思想
 - 5 1930年代とは何か ★危機の時代
 - 6 戦後とは何か ★シヴィル・ミニマムか市民社会像か
-

